

パラリンピックへの期待と理学療法士の役割

3 パラリンピックへの期待と理学療法士の役割

大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科 奥田 邦晴

理学療法士とは、「ケガや病気などで身体に障害のある人や障害の発生が予測される人に対して、自立した日常生活が送れるよう支援する医学的リハビリテーションの専門職です。(協会ホームページから引用)」とある。

一般的に、理学療法や理学療法士を説明する際には、この文にもあるように障害という語や障害のある人、つまり障がい者という語が数多く用いられる。一方、国連・障がい者に関する世界行動計画(1982)において、リハビリテーションとは、「身体的、精神的、社会的に最も適した生活水準の達成を可能とすることによって、各人が自らの人生を変革していくことを目指し、且つ時間を限定した過程である」と報告されており、障がい者のリハビリテーションを「自らの人生を変革していくための手段である」と定義づけることができる。

このように、理学療法士はその大きな対象が障がい者にあること、そして、障がい者の人生を変革していくための手段を提供しよ

うとするものであり、どれだけ豊かな人生を送ってもらえるようになるかが大きな目標になる。

その手段の一つにスポーツがある。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定した今、理学療法士にとってこのチャンスを逃す手はない。東京パラリンピックにいかに関与するか、何ができるかが重要課題となる。そして未来への理学療法の展望として、障がい者支援について再考、熟考を重ね、具体的に行動していくことが大切となる。

トレーナーはもちろんのこと、若手選手の発掘や育成に対する情報提供者としての理学療法士への期待は大きい。また、指導者、大会運営者そして競技力向上のための科学的支援・研究ができる点も、理学療法士の大きな武器となる。東京パラリンピックを契機とし、様々な角度から積極的かつ緻密な障がい者の理学療法ムーブメントを一步一步展開していきましょう。

動物に対する理学療法

1 動物の姿勢と歩様からみる疾患

¹⁾アニマルクリニックこぼやし、
²⁾金沢大学 医薬保健研究域医学系 環境生態医学 公衆衛生学教室
小林 孝之^{1,2)}

近年日本の獣医学領域では神経疾患・整形外科疾患を中心に理学療法リハビリテーションの重要性が認識され、患者動物と飼い主はより高品質なケアを手に行うことができるようになった。これは人医療からの情報提供と領域を超えた交流の賜物である。しかし人と犬とは基本的に同じ構造を持つものの使われ方が異なることから、リハビリテーションに参加する者が互いにその違いを知り理解する事から全てが始まった。

犬は正常な姿勢として四肢での起立を示し、胸椎から骨盤にかけてほぼ水平な背線を観察することができる。四肢に異常がある犬は背線を丸めるような姿勢を示すことがある。同様に前肢後肢のどちらか1側に異常があると正常肢は正中に移動して片足に体重をかけるようになる。その場合尾は正常肢側に来る。歩行は4ビートで常に3本の足が着地しており、右後肢・右前肢・左後肢・左前肢の順に足を上げて前に進んで行く。歩行の異常は負重の低下や歩幅の減少からも推測される。側方から観察すると、前肢

は指端と肩甲骨上腕関節を結ぶ線が地面に対し垂直で、肩甲骨の肩甲骨棘の線がおおよそ30度の角度で交わっている。前肢に異常があるところの角度が小さくなる傾向がある。後肢趾端は坐骨結節よりも後方にあることが基本である。足根関節が機能しているとアキレス腱と踵骨が尾側に突き出し趾端が頭側に下がって接地する。アキレス腱の付着した踵骨が脛骨と並行に近づく立位は異常である。また正中矢状面での観察から片足を正中近くに置く、足を浮かせる、尾を左右どちらかに傾けている場合も異常のサインである。歩行させると首を上下に振る・足をあげるなど背断面での異常に気がつくことができる。矢状面での観察から左右の筋量を確認する。腰を左右に振るような歩き方をすることがあり、これらも異常を示すサインである。

基本的動作の理解は、動物リハビリテーションに参加する全ての者に求められる重要なスキルである。